

千刈狸の呟き

～ジョン・ウェインはなぜ死んだか～

ボケ狸

福島原発事故の余韻、いまだ冷めやらず.. というか、落ち着く気配も感じられない。ボケ狸は、地震大国の日本に54基も原発があるのを知らなかった。米国ではコストが大きく原発はほとんど稼働していないと思込んでいたからであった。

20年以上前に読んだ、英国雑誌ジ・エコノミスト特別編集「ビジネス トラベル・ガイド アメリカ」(角川書店、昭和63年)の影響であった。米国のエネルギー事情について「電気事業：石炭による火力発電が全米電力供給量の60%ほどであり、1980年代は石油や天然ガスを抑えて石炭がシェアを拡大してきた。かつては未来のエネルギー産業の大きな希望に思えた原子力も少しずつ市場に入り込んでいるにすぎず、そのシェアは16%未満で低迷を続けている(中略)。原子力発電の凋落.. 当局の原子力産業に対する失望の最たるものは、安全性よりもコストの問題だ。(中略)このことが、原発建設計画の撤回や操業率の低さと相まって原子力による発電量を抑えている(略)」と書かれていた。

同じころに読んだのが、「ジョン・ウェイン(JW)はなぜ死んだか」(広瀬隆;文春文庫、1986年)だった。ネバダで核実験が行われていたところ近く(といっても東へ220キロメートル)のユタ州でロケをしていたJWやゲーリー・クーパーなどの多くの名優がその後まもなく発がんして鬼籍に入った。ネバダで核実験が行われたのは1951-58年、JWがユタ州で「征服者」のロケを行ったのは1954年で、6月から90日間にわたり、砂漠の中で、ハリウッドからのスタッフ・キャスト220人、現地インディアン300人、エキストラ900人、総勢1400人が撮影に取り組んだという。このハリウッドからの参加者220人中、91人が癌にかかり、41人が死亡している(1986.1月現在)という。この本を読んでいて、面白い記事があるのに気づいた。

「ネバダでおこなわれた大気中の核実験は、きわめて広い範囲に死の灰を降らせた。原爆が爆発すると、発ガン性を持った死の灰が降ることを、1950年代のはじめに当局は知っていた」が、「当局はこの危険性について『死の灰は、"ほとんど人の住まない土地"に降るので安全だ』と説明した」(同書221頁)という。

また、「フィルム・バッジ、コンピューター、モ

ニタリングポストなど、さまざまな精密な機器を使って、絶えず放射能の監視をおこなっていますので安全です」(1957年3月に配られたパンフレット)(同書128頁)。そして、「被曝量は、胃のX線検査の最大被曝量に比べて、実にその2.5%というわずかなものだ」と発表された(同書112頁)という。

前者のセリフは、日本国内の原発建設促進の際、人口密度の少ない、人里離れた所に建設を続けた時の説明に、後者は、最近のいざ事故が起こった際の避難誘導の遅れなどの説明に酷似しているようにボケ狸には聞こえるのである。

発電のエネルギーの質を判定するのに、エネルギー収支比(EPR: Energy Profit Ratio, Energy Payback Ratio)を用いるというが、計算の仕方によっては高くも低くも出るようである。冒頭に紹介したトラベルガイドの記載時では、原発は火力発電に比べてEPRが著しく低かったと想像されるし、その後、米国で104基も建設・稼働されたということは、やり方によって、EPR大きく伸びたということになる。そして、東日本大震災、福島原発事故を経験すると、「地震・津波などの自然災害に耐える安全対策、使用済み核燃料や廃炉などの恒久的で安全な処理・処分、不可抗力の重大事故が起きた際の損害賠償への備え。こうした費用を織り込めば、原発は安上がりな電源ではなく、民間企業の手にも負えるものではない」(日経新聞コラム:東電問題を考える視点、5/24/11)ということは、EPRがそれほどでもないことを示していよう。

朝日新聞2000年3月6日の第一面に「火力発電6基停止へ東京電力 需要が伸び悩み」の記事があり、「4月から5年間停止することを決めた」という。つい数年前まで、東京圏で電力が余っていたことなるうか。

5月9日、菅首相は、中部電力に浜岡発電所の停止を申し入れた。それを報じた翌日の読売新聞の2面に『浜岡だけは止めないとやばい』、『突き詰めれば、全国の原発を止める必要があるとの結論になる』、『経産省幹部は、苦渋の決断をこう振り返った。』という記事が載っていた。ちゃんと分かっているじゃない。"わかっちゃいるけどやめられない"ー官僚というのは仕様がない人種というのがボケ狸の感想である。